聖　書：使徒 10：1〜23a
説教題：神がきよめた物を
日　時：2013 年 11 月 17 日

使徒の働きは 10 章で新しい段階に入ります。それはいよいよ異邦人宣教の御心がはっきり示されるという段階です。これまでもこのことに向けて少しずつ小さなステップが踏まれて来ました。イエス様は復活後、使徒たちに、あなたがたは聖霊を受けてエルサレム、ユダヤとサマリヤの全土および地の果てにまでにわたしの証人となります、と言われました。ペンテコステの日には世界各地から集まって来たユダヤ人に色々な国ことばで福音が語られました。ステパノの殉教から始まった迫害によって散らされた信者たちが諸地方で福音を語り、サマリヤにまで主の教会は拡がりました。ピリポは主に遣わされて、エチオピアの宦官の救いのために仕えました。そしていよいよここで福音は異邦人にも向けられるという御心が正式に示されることになります。使徒の働きを執筆したルカは、このことを非常に重要に考えているため、このいきさつについてはくどいと思われるほどたくさん紙面を割いて書いています（10 章 1 節〜11 章 18 節）。ここを 3 回に分けて見て行きたいと思います。

この御心を示すために神はまずカイザリヤにいる人に働きかけます。カイザリヤはローマ皇帝カイザルに敬意を表してヘロデ大王が建てた町です。かつてここは小さな港町にしか過ぎなかったようですが、新しく建て直されて、この地方になくてはならない主要な港として大いににぎわう大都市となっていました。いかにも当時の世界を象徴するような町が選ばれたことは、異邦人宣教の御心が示されるにふさわしいと言えるかもしれません。そして神が働きかけたのは、その町にいたイタリヤ隊という部隊の百人隊長コルネリオ。彼もまた当時の異邦人世界を代表する人物としてふさわしいと言えます。このコルネリオは「敬虔な人」と言われています。彼は割礼を受けた改宗者ではありませんでしたが、イスラエルの唯一神を信じ、神を恐れ敬う信仰に生きていました。彼の敬虔さは、全家族と共に神を恐れかしこむ歩みに現れていました。また彼はユダヤの人々に多くの施しをするという愛のわざにも熱心で、いつも神に祈りをしていました。そして午後 3 時の祈りの時間に幻を受けたのです。御使いは彼に現れて、彼の名を呼びます。そして恐れる彼に対して「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って覚えられています。」と語ります。これは祭壇でささげるいけにえのイメージの言葉です。コルネリオは異邦人であるため、エルサレムの宮でいけにえをささげることはできませんでしたが、彼の祈りと施しはかぐわしい香りとなって、日々神の前に立ち上り、覚えられていたのです。私たちの礼拝行為は、このように誰かに見られていなくても神の前に立ち上り、神に喜ばれるささげものとなり得るのです。

御使いはコルネリオに語ります。5〜6 節：「さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。」そして彼から話を聞くようにとの御告げを受けます。それがどんな内容か、彼にはまだ知らされません。この御告げを受けて、コルネリオはさっそく従います。しもべたちの中から二人と側近の部下の中から敬虔な兵士一人を呼び寄せて、全部のことを説明してからヨッパへ遣わします。

一方で神は 12 使徒のリーダー、ペテロにも働きかけます。コルネリオに神の働きかけがあった翌日、時は昼の 12 時ごろ。ペテロは祈りをするために屋上に上りました。彼も時を定めて、このように祈りの時間を持っていました。しかし祈るために屋上に上ったのに、ペテロは非常に空腹を覚え、食事がしたくなった。それで食事の用意をお願いしたのでしょう。するとそれを待っている間、今度はうっとりと夢心地に。さっきまではお腹がすいてどうしようもなかったのに、次の瞬間にはうたた寝を始める。一体お祈りはどこに行ってしまったのか。しかし今回はペテロを責めることは間違っているかもしれません。夢心地になったのは幻を見るための神の導きだったかもしれません。またお腹がすいたのも、その幻の内容と関係していることを思えば、これまた神の導きによることだったのかもしれません。

夢の中の啓示は次のようなものでした。見ると天が開けており、大きな敷布のような入れ物が四隅を吊るされて地上に降りて来た。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」という声が聞こえた。いくらお腹がすいていたとはいえ、ペテロはビックリして言います。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがありません。」これは旧約聖書で言われていたことに基づくものです。主はレビ記 11 章や申命記 14 章で、食べて良いものと食べてはならない汚れた物とを区別されました。レビ記 11 章 3〜4 節：「動物のうちで、ひづめが分かれ、そのひづめが完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい。しかし、反芻するもの、あるいはひづめが分かれているもののうちでも、次のものは、食べてはならない。」そして食べてはならないものとして、らくだ、岩だぬき、野うさぎ、豚などがあげられています。さらに水の中にいるもので食べてはならないもの、鳥の中で食べてはならないもの、四つ足で歩き回るものの中で食べてはならないもの、地に群生するものの中で食べてはならないもの、などがリストアップされています。それらがこの天から吊るされた敷布の中にはたくさん混じっていたのでしょう。ペテロがそれを見て「とても食べられません！」と叫んだのも、もっともなことです。しかし天から声が聞こえます。15 節：「すると、再び声があって、彼にこう言った。『神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。』」こんなことが 3 回繰り返されて後、入れ物は天に引き上げられました。

ペテロがこの幻を受けて思い惑っていたその時に、コルネリオから遣わされた人たちがペテロの宿に到着します。神の絶妙なタイミング、摂理によることです。しかしペテロがこのことを知ったのは、宿の主人から呼ばれたからではありませんでした。19 節に御霊がそのことを示したとあります。これからなされる出会いが人間的なものではなく、神によるものであることを示すためでしょう。そして 20 節で「さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」と言います。「ためらわずに」という言葉には印がついていて、欄外に別訳として「何の差別もつけずに」とあります。下に降りて見ると、そこにいたのはローマの百人隊長から遣わされた人たちでした。その百人隊長がペテロを家に招きして、お話を伺いたいというのです。本来このように異邦人からの招きを受けても、応じないのがそれまでの慣習でした。28 節でペテロは言います。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。」　しか

しペテロはたった今、聖霊から「何の差別も付けないで」と言われました。またその前に「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない」という幻を見ました。そこでペテロは 3 人を中に入れて泊まらせたと 23 節にあります。ここに立派なペテロの服従の姿があります。そして翌朝、彼らと一緒に出かけて行って、彼は主のさらなる導きを受けることとなるのです。

続きは次聖日に見ます。今日の箇所から私たちが心に留めたいのは 15 節の御言葉です。戸惑うペテロに神は言われました。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」元をたどれば、きよいものときよくないものとを定められたのは神ご自身でした。なぜ神はこのような区別をされたのでしょうか。それはイスラエルが聖なる神の民として、きよく歩むことを具体的に学ぶためです。神は一人の人アブラハムからイスラエルを起こし、彼らが世の国々とは別の道を行くようにされました。すなわちこの世の流れと一緒になって歩むのではなく、聖なる神の民としてきよい歩みをするように召されたのです。そのために神は、きよいものときよくないものとを区別し、イスラエルが日常生活の中でこの区別に気を配り、きよいものだけを選び取ることによって、主の民としてきよく歩むことを学ぶように導かれました。しかし間違ってならないのは、イスラエルがこのように選ばれ、きよい歩みの訓練を受けたのは、自分たちを誇り、他の国々を見下すためではないということです。神がアブラハムを召した時の創世記 12 章 3 節には「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」という言葉があります。つまりアブラハムの召命の背後には、全世界に対する神の良い御心があるのです。イスラエルが選ばれたのは、他の国々の祝福に仕えるため、聖なる祭司の国となるためです。イザヤ書 49 章 6 節：「主は仰せられる。『ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。』」このように神は最初から全世界の祝福のことを考えておられました。そのより良き展開のために、イスラエルを選び、用いて来られたのです。しかしついに「あなたによって地上のすべての民族は祝福される」と約束されていたメシヤが現れ、みわざを成し遂げました。その新しい時代がついに到来したことと 15 節の言葉は関係しているのです。

では実際的に 15 節はどういうメッセージを語っているものでしょうか。それはまずこれまでの旧約の儀式律法の廃止を意味します。神が与えてくださった律法の中には、十戒など永遠に変わることのない普遍的な律法と共に、旧約時代のイスラエルを導くための歴史的な制約を持った律法があります。これはキリストへの信仰へとイスラエルを導くための「絵」のようなものです。旧約時代のイスラエルは、聖書によれば、幼児教育を受けていたような時代です。幼児には様々な目に見える小道具が必要でしょう。様々な食事規定もそれに当たります。しかしそれらが指し示しているキリストがついに現れたのですから、これまでのきよい、きよくないという区別による学びは終わりとなり、彼らは本体であるキリストへの信仰に生きるべきなのです。

そしてこの 15 節は、救いがついに全世界の人々にもたらされる時が来たことを意味します。異邦人はこれまで神の契約の外に置かれて来ました。そんな彼らはイスラエルから見ればきよくない人たちでした。しかし神はその異邦人たちをもわたしはきよめたと言っておられます。すなわちこの意味は、神は異邦人たちの救いをも心にかけておられ、彼らにも今や救いの恵み

を提供されるということです。これは神の大いなる恵みの御心の現れです。私たちは自分の罪ゆえに神に捨てられて当然の者たちです。何らこのことで神に文句を言ったり、要求したりできない者たちです。しかし神は全世界に対する救いの計画を立てて、ついにキリストを送り、この方によってどんな者をも無償で赦し、きよめてくださる時を来たらせてくださったのです。

この示された御心を前にして、私たちがなすべき第一の応答は、神がこうして備え、差し出してくださった救いを心から感謝して受け取ることでしょう。このイエス・キリストにおいてこそ、私たちの罪の赦しと全き聖めがあります。この方を受け入れたなら、15 節の言葉はより強力な言葉として私たちに臨むことになります。私たちは自分を振り返って、私は全然きよめられていないと思うかもしれません。あるいは他の人が私のことをそのように言うかもしれません。しかしキリストを受け入れた私たちに神は宣言してくださいます。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」

そしてこの言葉は全世界の人々に対する神の熱烈な愛を証ししています。神はまさにすべての人がイエス・キリストにあって救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。私たちはこの全世界の一人一人の魂を追い求める神の熱心に動かされたいと思います。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」 このように語っておられる神に導かれて、福音をすべての人に届ける働きのために祈り、また仕える歩みに自らをささげて行きたいと思います。